

【資治通鑑翻訳の方針・経緯】

■「資治通鑑」の仮翻訳公開 2020-0408

一昨年8月26日から取り組んだ、中国「資治通鑑」の全訳。一応当初の予定の119巻～141巻（420年～498年）を公開。

吉備古代史小説「勾玉の首飾り」の書き直しのために、日本の古墳時代の雄略天皇の時代を中心に翻訳を開始し、前後に広げて、南朝宋の始まった「宋記」の始めから南朝齊の終わりくらいまで。

約41万字余りか、大体1ヶ月に1巻位しかできなかったが、コロナで自宅にいても多く、最近随分進んだ。

日本書紀の記述に対して、同時代の中国には膨大な記録があるが、「資治通鑑」も三国志あたりは随分たくさん翻訳があるものの、戦前翻訳されたとはいえ、今では翻訳を手にいれられなくなっている。

一昨年ひょんなことから、pdfファイルの検索性の高いのに気がつき、平成4年に連載された自分の小説をスキャンしてpdfにしたところ、ほとんど完全にワードファイルに変換できた。そこで今度はホームページから中国語の「資治通鑑」のテキストを取ってワードに貼り付けて翻訳開始。

有り難いのは、ペーストして検索を掛けると、どんな複雑な感じでもたちどころに日本語訳が出てくる、検索エンジンの漢和辞典化の威力。また中国語の熟語は本当に凄い量だが、検索すると中国語の辞書も出てくる。

幸い僕は高校時代漢文も好きだったが、第2外国語で中国語も取った。だから抵抗は少ない。最も48年に及ぶ古代史の知識は膨大で、この知識無くしては翻訳することは不可能だろう。

しかし一方で、僕は文法くらい嫌いな物はないほど苦手。だから漢文の正確な訳を作るだけの能力はまた持ち合わせていない。しかしなおかつ、この翻訳が、日本の古墳時代研究に役立つと考え、公開に踏み切った。正確さには欠けるのでご容赦いただきたい。また転載には一定の転載ルールに従って、いただきたい。（岡将男）

■「資治通鑑」 2020-0413

「資治通鑑」は「宋書」を参考に編纂されている。「宋書」にはいわゆる「倭の五王」の朝貢記事が載っているが、これは「本紀」部分や皇帝の日記である「起居注」にあるらしい。しかし「資治通鑑」ではそこまでは載っていない。一方「宋書倭国伝」には倭の五王の朝貢記事がある。

この時代に宋国内がどんな状況にあったかは、「資治通鑑」の編年体記述が参考になる。倭の五王が宋から貰おうとした將軍号なども、頻繁に出てくるから、どんな意味があるのかも想像が付く。

また「日本書紀」の記述にはストレートに倭の五王は出てこないが、呉との通行は雄略天皇時代には出てくる。この3つをまずは簡単に見比べてみたい。なお「日本書紀」では457年を雄略天皇元年に当てているが、実際には462年に安康天皇が暗殺されているから元年は463年であり、この年に吉備の反乱伝承が記載されている。また日本書紀にもこの時代に対応する様々な記事が散見される。そこでいくつか代表的な年号について関係を述べてみたい。

■資治通鑑と卑弥呼 2020-0613

資治通鑑翻訳と卑弥呼の時代との関係について、パワーポイント講演資料を作成。100枚ほど。ZOOM

で中継できるか、昨日詳細に伊藤昌毅さんの ZOOM で中継の記事を読んで勉強。まずは 15 分ほど録画してみたら、ちゃんち Zoom のファイルに変換されていた。それを you-tube に上げてみた。この調子で、邪馬台国中四国支部の入会開設とか、古代三都物語とか、楯築サロンだとか、パワポはたくさんあるから、作れるね。

<https://youtu.be/-yOw2wkgIC0>

古墳時代の中国で出てくる「開府儀同三司都督●●大將軍」というような称号の開府とは、いわば幕府を開いて滅び政治権力を取るという意味で、それこそ江戸時代は三国志時代の延長だったということ。卑弥呼や天皇制は基本的に政治的権威だったというわけ。

ただ、インカムがないので、家族の音や猫の鳴き声を拾うかもしれないな。

■資治通鑑と古墳時代 2020-0711

資治通鑑の翻訳もつついあれこれやってしまうが、面白い。

さて明日は吉備歴史会として初めて Zoom で講演会を開くことにした。まずは僕が「資治通鑑から見る古墳時代」と称した話をして、そのあと参加者との懇談だ、自宅飲みしていただければいい。

「資治通鑑から見た古墳時代」7月11日(土)20時から21時 講師 岡将男

なお本日「資治通鑑」第108巻392年から396年を掲載。後燕の皇太子慕容宝が北魏に敗れ、慕容垂が反撃に出て客死する。北魏と北燕の勢力関係が逆転する「参合陂の戦い」がなかなか面白い。

そして丁度この時期、北燕は北魏との戦いに忙しく、高句麗との戦いに兵力を割く事が出来ず、高句麗は安心して南の新羅や百済に攻め込むことができた。有名な高句麗好太王の碑文に出てくる、倭国との戦いの背景を知ることが出来る。

■「資治通鑑から見る古墳時代」Zoom 講演会 2020-0712

初めての Zoom 講演会を開催、28人も参加していただき、ありがとうございます。今日が初めての Zoom という方も7人くらいいたかも。みんな人生の転換点で、選択の余地が広がったのかもしれない。

正直、講演しながらの参加者管理は慌ただしい。それと何回か通信が不安定になって、びくびく。講演そのものに集中はできなかった。なのでパワポの準備に手間をかけていたので、これは正解かも。

参加の皆さんも、通信状態とか、操作とか初体験で大変だったと思いますが、このネットワークは生かしていきたいものです。ウズベキスタンの一杉さん、札幌の加藤さん、大阪の長緒さん、米子の小椋さん、遠路はるばるご苦労様です。一気に距離がなくなりましたよね。全員に自己紹介をお願いできませんでしたが、またよろしくお願いします

■資治通鑑翻訳 2020-0823

「資治通鑑」の翻訳も峠を越えたかな。107巻の387年から144巻の501年まで一応やった。丁度丸二年。原文390271文字が707414文字に。38巻中25巻は完訳したが、まだ13巻は仮訳。全体には78万字になる。原稿用紙なら2000枚は軽く越える。

邪馬台国論争というが、魏志倭人伝はたった2000字で、どう料理しても邪馬台国確定なんて無理。相変わらず日夜里程遠記事を計算してる在野の研究者は多い。

また日本書紀や古事記の記事と合わせて、特に天照とかスサノオという有名人になぞらえる研究も多いが、無駄に近いのではないかな。日本書紀古事記を読んだ後世のかき混ぜ方が半端じゃないし、特に明治以後の政治的意図的書き換えはメチャだ。

今回の翻訳は、最初は悪戦苦闘だった。なんせ、「漢字なら何でも知ってる漢字マニア」は好きじゃない

もんな。だが、漢和辞典はすべてネット検索で済ました。原文はネットで探してダウンロード、コピペして検索、中国語の辞書もかなり使った。

ただ現代中国語の簡体字はまだよくわからないから、少しは勉強する必要がある。地名などは戦前昭和8年の翻訳を参考にした。簡体字じゃないから、かなりわかる。ただ、地名とはこんなに変化するものだと感じた。

さらに、ありがたいのは Wikipedia で宋書とか晋書を読み込んで作ってくれているマニアがいることだ。基本タダで公開してるが、この翻訳でも書籍化する価値は十分にある。100 部位は刷っとくかなあ。A4 で 600 ページ。いくら、かかるかな。クラウドファンディングでもするかな。

【資治通鑑書き下し解説・各巻】

■「資治通鑑」第 96 卷 338－341 年 2021-0404

蜀の「大成」では内乱が起き、一族の李寿が「成漢」を立てる。華北では後趙の石虎が段遼を前燕の慕容皝と組んで圧迫、結局燕とも戦い敗れる。慕容皝と仲違いしていた慕容恪は段氏から宇文に逃げ、さらに燕に戻り、341 年遼東半島の付け根の平郭に陣取り、高句麗を圧迫。高句麗は後趙と組んで前燕を圧迫していたが、ようやく後趙の石虎、太子の石宣の政治が苛烈を窮め、燕には余裕が出てきた。次の 97 巻では 342 年に燕は高句麗の首都丸都、今の集安を占領する。

なおこの時期、前燕には「朝鮮公」「樂浪太守」や「玄菟太守」など後の高句麗領の地名が沢山出てくる。高句麗はこの先 100 年、常に前燕、前秦、後燕、北燕との抗争にあけくれ、それに百済や倭国が絡むことになる。

■「資治通鑑」第 97 卷 342-347 年 2021-0326

鮮卑族の立てた前燕の慕容皝は、遼西の山間部の現在の朝陽あたりを根拠地に、遼東を高句麗と争っていた。342 年慕容皝は平坦な北道でなくわざわざ険しい南道から高句麗の丸都城、今の中国遼寧省と北朝鮮の国境にある集安を攻めて占領。

だが高句麗王は逃亡し、慕容皝は高句麗王の母を拉致し、父の墓を暴いて遺体を持ち帰る。ここに一度高句麗は亡びたとも言える。以後高句麗は常に燕国の機嫌を取り、しかし隙あらば狙うという関係になる。倭国と高句麗はしばしば争うことが多いが、当然ながら高句麗背後の燕国と倭国は「遠交近攻」で組むことも多かったろう。しかし倭国と高句麗の間には、この頃から国として新羅、百済が勃興し、加耶も半ば自立して、各国の関係は複雑であった。しかもそれぞれの内部ではまた分裂抗争が続き、敵の敵は味方と、「倭国」「百済」「新羅」という国単位で物事が進んでいたわけではない。

343 年 2 月高句麗は燕国にわびを入れて父親の屍を返還してもらうが、345 年燕の慕容恪は遼東半島の高句麗の南蘇城、今の大连を攻めて占領する。母親の送還は 355 年までズレ込む。それ以後中国の歴史から高句麗はしばらく消えて、370 年の前燕滅亡まで登場しない。

■「資治通鑑」第 98 卷 348～350 年 2021-0313

後趙石虎と冉魏冉閔の大虐殺

現代でも様々な陰謀説があり、人間は大虐殺をしてしまう。古代中国でも真偽はともかく、二十万人の大

虐殺は間々ある。後趙の石虎は寵愛する息子を、自らの太子に殺されて、太子一家を凄惨な皆殺しにする。またその流れで子供たちは殺し合い、その中から養子の石閔は胡族二十万人を虐殺する。趙の石氏一族は羯族という胡族だから、鼻が高い者が多いが、養子の石閔は漢族だ。鼻の高い漢族も、胡族に間違われて虐殺されたという。

また鮮卑系の慕容皝も薊、今の北京を攻めたとき、皝は悉く其の士卒千餘人を坑せんと欲し、慕容霸は諫めて曰く：

「趙は暴虐を為し、王は師を興こして之を伐ち、將に以て民を塗炭に拯(すく)い而して中州を撫有せんとする也；今始めて薊を得而して其の士卒を坑にすれば、恐らくは以て王師之先聲と為す可からざる也。」と「坑」という漢字が使われる。すべて生き埋めにするという意味の漢字だ。さてさて現代のコロナ禍は、後世どのように評価されるのだろうか。とにかく見ておいて、書き留めておこう。どんどんビデオを録っておいて、あとで誰がひどいこと言ってるか、やってるか、覚えておこう。検証のための記録、将来のための記録、それが人類の得た「歴史」という財産のはず。

https://image02.seesaawiki.jp/.../shijitug.../_r2qOBWUjQ.pdf

なお小林恵子は慕容皝がヤマトタケルだという。そういやタケルは兄を虐殺するんだよな。

■「資治通鑑」第 99 卷 351～354 年 2021-0302

五胡の北朝の後趙が崩壊し、前秦・前燕が膨張、冉魏なんてのも出てきた。数年間は中原を荒らし回る冉閔は、前燕の慕容皝に殺される時、「何故皇帝を名乗ったか」と聞かれて、「夷狄禽獸の類いでも皇帝を称す」と答える。羌族の姚襄などの政治勢力は、後に後秦という国を建てるが、元々は陝西省の奥にいて、一時は黄河下流の清河に一族遷り、後趙、冉魏から一時は東晋に降り、さらに前燕に降り、自立して洛陽や長安をめざし、前秦の苻健に敗れて、十数年はその配下であちこち転戦し、384 年の淝水の戦い後自立する。

丁度こんな時代に、日本は古墳時代前期を迎えていた。小林恵子は「前燕の慕容皝は日本武尊（ヤマトタケル）だ」というのですよ。その真偽を確かめるために翻訳を続けているが、実に日本の古墳時代を解く鍵が、沢山有るね。

特に慕容皝は皇帝になるとき、渤海王や樂浪王や帶方王を任命しているんだよね。高句麗は前燕にコテンパにやられて、国がほぼ消滅しているんだよね。当然百済も倭国もその配下にあったともいえる。少なくとも中国本土との交易は、前燕を通さないと出来なかったはず。遊牧民族だから、馬や羊を追っていただけではないんだよね。 <https://image01.seesaawiki.jp/.../shijitug.../xTfKeb5M4n.pdf>

下の地図は「魏晉難北ブログ」さんが、詳細に作られたもの、素晴らしいよ。大変に参考になる。

■「資治通鑑」第 100 卷 355-359 卷 2021-0217

358 年前秦の苻堅のところ

九月、庚辰、秦王の堅は長安に還り、太尉の侯を以て尚書令を守らしむ。是に於いて秦は大いに早す。堅は膳を減らし樂を徹し、后妃以下に命じて悉く羅紃（立派な衣服）を去らしむ；山澤之利を開き、公私之を共にし、兵を息めて民を養う、早は災と為らず。

為政者たるものは、こういう姿勢でないといけないね。干害も災害にはならなかったというわけだ。

コロナ禍も政府が適切に、経済支援をしていれば、災害には成らなかったはず。今日は RACDA の Zoom

会議で、安藤議員から MMT の話しも聞いたが、経済支援をしないのは失策だとおっしゃる。

日銀の大量の株の買い支えができて、なぜ経済支援ができないのか、僕もそう思う。自殺者の激増は、人的災害ではないのか。

■「資治通鑑」101 巻の頃 七枝刀探訪 2021-0107

370 年に慕容暉の前燕が滅ぼされたが、小林恵子はこの暉が倭王に石上神宮にある七枝刀を贈ったのではないかという。実はこのあたりを調べるため「資治通鑑」101 巻から 103 巻を翻訳した。本日 103 巻をアップした。

さて七枝刀には「泰〇四年」という表現があり、

- 1.西晋の「泰始四年」(268 年)として判読する説(管政友)。
- 2.東晋の「太和四年」(369 年)とする説(福山敏男、浜田耕策ら)。「泰」は「太」と音通するため。
- 3.劉宋の「泰始四年」(468 年)説(宮崎市定)

の 3 説が従来唱えられている。

一方今年 1300 年になる日本書紀の神功皇后 52 年には

「五十二年秋九月丁卯朔丙子、久弋等從千熊長彦詣之、則獻七枝刀一口、七子鏡一面及種種重寶～」という記事があるが、これは一応 372 年という説が有力だった。

だがいま暦を調べてみると、九月丁卯朔なのは、371 年になる。これなら時代は合うように思う。この場合既に前燕は前秦に滅ぼされ、慕容暉は前秦に捕らえられて長安にいた。小林恵子は慕容暉が 369 年に前秦との戦いに援軍を求めて倭王に贈ったと考えたが、この七枝刀は百済王が贈ったとされているものの、百済王が慕容暉から貰って、倭王に贈ったのかもしれない。銘文からは倭王宛てに造られたという証拠はない。

さて「慕容」とは「歩いて揺れる」すなわち「歩揺(ぼよう)」からきたという説がある。それは金の王冠の飾りが、歩くとチャラチャラ音がするからだといい、その飾りは樹の形の突起についていたという。このデザインが新羅に伝わり、金の王冠になっているらしい。韓国の慶州に行ったとき買った天馬塚の金冠(写真は 1/6 の模型でいま僕は持っている)は国宝にもなってるが、このデザインは慕容氏のデザインだ。

だが、慕容氏には金の王冠があったのかはわからない、むしろ新羅に多く、一部は百済にもあり、倭国にも伝わって、藤ノ木古墳のが典型的な新羅王冠だし、江田船山古墳からは内冠だけが出土。日本書紀に出てくる大草香の持っていた「押木玉蔓」というのが勾玉付の王冠だ。根の臣が横領していて、雄略天皇時代に発覚したという日く付き。

小林恵子の卓見は、七枝刀のデザインは慕容氏のものだということ。そしてこの 371 年あたりの極東の勢力争いを倭国と三韓だけでみていては、何にもわからない。370 年前秦滅亡、360 年苻洛の反乱で三韓倭国への救援要請、383 年淝水の戦いと後燕の建国、385 年高句麗の後燕侵略と後燕の高句麗討伐、386 年高句麗に後燕から送り込まれた安氏の好太王の立太子と、中国本土の戦いが関係している。

<https://image02.seesaawiki.jp/.../shijitug.../dxXiNOd85s.pdf>

■「資治通鑑」第 102 巻 369 年 2021-0102

日本では平成の年号までは、中国古典から年号を取った。

さて「資治通鑑」第 102 卷 369 年、南の東晋の桓温將軍に攻められた前燕は、梁琛を使者に立てて前秦の苻堅に援軍を要請。その中での言葉

「太傅の上庸王の評は、明德茂親、王室を光輔す；車騎大將軍の吳王の垂は、雄略にして世に冠たり、折衝（駆け引きして）御侮（外的を防禦す）す；其の餘は或は文を以て進み、或は武を以て用いられ、官は皆な職に稱（かな）い、野に遺賢は無し。」

さてその後、後燕皇帝となる慕容垂を「雄略」と表現しているんですね。

雄略天皇は在世中に雄略と言われたわけではない。大泊瀬幼武、ワカタケルとかだが、宋に使者を出したときは倭王武である。まあいわば泊瀬のタケルさんなのだが、実は泊瀬は長谷であり、今の長谷寺のあったあたりにいたかもと。

ところが後に後燕が北燕になった二代目の皇帝馮跋は「長谷」にいたという。

私はいまこの時代の小説を書いていて、特に雄略天皇の出自は、百済にいた馮野夫で、その後百済の王族になって餘昆となり、さらに倭国に昆支王として渡り、雄略天皇に変身したという筋でいこうと思っている。

馮野夫は百済の外交官で、南朝宋の建康に 450 年に行っているが、この翌年には倭国も使者を送って將軍号をもらっている。北燕は既に滅亡して慕容氏一族も馮跋一族も離散して各地の豪族に同化しているのだが、逆に言えば深く食い込んでいともいえる。馮氏などはその直後に北魏の宮廷に入り込んで、馮皇后は皇帝をも廃嫡した。

彼らは外交や交易に長けており、どこにいても重宝された。当然字も書けるし文章も作れるし、最新の技術や知識に恵まれている。

さて奈良時代に淡海三船が天皇の名前を漢字二文字にしたとき、当然ながら「雄略」の言葉をどこからか持ってきた、それは慕容垂の雄略からきたのかもしれない、血のつながりがあったからかもしれない。

小林恵子は仁徳天皇は高句麗好太王だといい、好太王は慕容氏の血筋もあり、安氏の血筋もあるという。また北燕の初代皇帝は慕容雲から即位時に高雲と名前を戻している。日本書紀では仁徳の孫が雄略だが、そんな簡単な者ではない。父方から継承されると同様な比率で、母方の継承があるのは、どの時代でも当たり前だ。入り婿の方が力があることも多い。

この頃の中国から倭国に至る王族は、豪族連合であり、様々な姓の者が婚姻関係で複雑に入り組んでおり、その関係をたどって外交や交易が行われていた。地縁血縁そして経済利権を丁寧に拾っていく必要がある。

■「資治通鑑」第 104 卷 376 年～382 年 2020-1027

前秦の苻堅は、河西回廊の前涼と北の代を滅ぼし華北を統一するが、380 年いまの北京から遼東にかけてを支配した一族の苻洛が反乱を起こす。実は「興亡古代史」を書いた歴史家の小林恵子は「苻洛が実は応神天皇」というのだ。また高句麗好太王が仁徳天皇だともいう。小林恵子は岡大出身で、資治通鑑は熟読していて、今回の翻訳では彼女のベースは資治通鑑だと分った。小林恵子が有名になったのは、1990 年に「聖徳太子の正体」を文藝春秋で書いたときからで、「聖徳太子は突厥の王様の達頭だ」というのだ。日本書紀を徹底的に批判する彼女だが、日本書紀の暦の部分についてはよく研究していて、邪馬台国卑弥呼あたりの記述は、僕が「吉備邪馬台国東遷説」を書いたベースにもなった。倭王は 2 人居て、1 人は卑弥呼でもう一人は「東倭王」だという考え方は採用させていただいた。今回の僕の翻訳は、小林恵子の

諸説を検討するためでもある。古代史では古田武彦の九州王朝論と並んで、随分人気のある小林だが、学会からは完全にトンデモ説とされている。だってほとんどの天皇は朝鮮または中国から来ているとするのだから。だが戦後の「騎馬民族征服説」以来、半分ばかり開かれた天皇制研究にあらたな 1 ページを開いたのが、小林恵子だと思う。小林は 1936 年生まれ、「白村江の戦いと壬申の乱」を書いて、天武天皇が天智天皇より年上だと暴いたのは、この世界では今は常識となっている。さて、この資治通鑑 104 巻では、小林が応神天皇だとする苻洛が、380 年に前秦の苻堅に対して反乱を起こすが、西海に流される話が出てくる。小林は苻洛がインド廻りで九州に上陸し、応神天皇になったとするが、これは今回読んでみて、いかにも苦しい。だが 383 年の淝水の戦いで前秦苻堅が大敗し、慕容垂の後燕が自立する中で、北廻りで倭国に入ったとするならば、大いに可能性はある。なぜなら 380 年の反乱では、高句麗、百済も新羅および休忍に援軍を要請したと資治通鑑にも書いてある。その「休忍」とはすなわち、忍熊皇子、日本書紀では応神天皇の異母兄である、と小林はするのである。ちなみに西域の鄯々の王も休姓なんだよね。鄯々は敦煌の隣り、ロブノール湖周辺だな。西海は近い。「休みしし天皇」という表現は、天皇家の姓が休だと小林はするが、さてさてどうなのか、これから探求していくつもりだ。ちなみに 383 年というのは、倭国含めた東アジアの大きな転換点になっている。慕容垂が高句麗に 385 年に勝って、送り込んだのが好太王安たというのは、僕も大賛成だよ。安姓はペルシャの安息国の王子からきているというのもあたりだろう。飛鳥にいくと、ペルシャの臭いがする、鼻の高い天狗だってペルシャかもしれない。なお慕容氏は「白鮮卑」ともいわれ、肌が白いのが特徴だったという。苻洛が応神天皇だとすると、岡山の造山古墳は応神天皇陵だと考えている僕としては、調べざるをえない。今日買った「造山古墳」では、陪塚の榊山古墳からは三燕、すなわち前燕、後燕、南燕の関係の遺物が出ているという。

前秦の苻堅は、河西回廊の前涼と北の代を滅ぼし華北を統一するが、380 年いまの北京から遼東にかけてを支配した一族の苻洛が反乱を起こす。

実は「興亡古代史」を書いた歴史家の小林恵子は「苻洛が実は応神天皇」というのだ。また高句麗好太王が仁徳天皇だともいう。小林恵子は岡大出身で、資治通鑑は熟読していて、今回の翻訳では彼女のベースは資治通鑑だと分った。

小林恵子が有名になったのは、1990 年に「聖徳太子の正体」を文藝春秋で書いたときからで、「聖徳太子は突厥の王様の達頭だ」というのだ。日本書紀を徹底的に批判する彼女だが、日本書紀の暦の部分についてはよく研究していて、邪馬台国卑弥呼あたりの記述は、僕が「吉備邪馬台国東遷説」を書いたベースにもなった。倭王は 2 人居て、1 人は卑弥呼でもう一人は「東倭王」という考え方は採用させていただいた。

今回の僕の翻訳は、小林恵子の諸説を検討するためでもある。古代史では古田武彦の九州王朝論と並んで、随分人気のある小林だが、学会からは完全にトンデモ説とされている。だってほとんどの天皇は朝鮮または中国から来ているとするのだから。

だが戦後の「騎馬民族征服説」以来、半分ばかり開かれた天皇制研究にあらたな 1 ページを開いたのが、小林恵子だと思う。

小林は 1936 年生まれ、「白村江の戦いと壬申の乱」を書いて、天武天皇が天智天皇より年上だと暴いたのは、この世界では今は常識となっている。

さて、この資治通鑑 104 巻では、小林が応神天皇だとする苻洛が、380 年に前秦の苻堅に対して反乱を起こすが、西海に流される話が出てくる。小林は苻洛がインド廻りで九州に上陸し、応神天皇になったと

するが、これは今回読んでみて、いかにも苦しい。だが 383 年の淝水の戦いで前秦苻堅が大敗し、慕容垂の後燕が自立する中で、北廻りで倭国に入ったとするならば、大いに可能性はある。なぜなら 380 年の反乱では、高句麗、百済も新羅および休忍に援軍を要請したと資治通鑑にも書いてある。

その「休忍」とはすなわち、忍熊皇子、日本書紀では応神天皇の異母兄である、と小林はするのである。ちなみに西域の鄯々の王も休姓なんだよね。鄯々は敦煌の隣り、ロブノール湖周辺だな。西海は近い。「休みしし天皇」という表現は、天皇家の姓が休だと小林はするが、さてさてどうなのか、これから探求していくつもりだ。

ちなみに 383 年というのは、倭国含めた東アジアの大きな転換点になっている。慕容垂が高句麗に 385 年に勝って、送り込んだのが好太王安たというのは、僕も大賛成だよ。安姓はペルシャの安息国の王子からきているというのもあたりだろう。

飛鳥にいくと、ペルシャの臭いがする、鼻の高い天狗だってペルシャかもしれない。なお慕容氏は「白鮮卑」ともいわれ、肌が白いのが特徴だったという。

苻洛が応神天皇だとすると、岡山の造山古墳は応神天皇陵だと考えている僕としては、調べざるをえない。今日買った「造山古墳」では、陪塚の榊山古墳からは三燕、すなわち前燕、後燕、南燕の関係の遺物が出ているという。慕容氏の探求が古墳時代のポイントになる。

■「資治通鑑」第 106 卷 385 年～396 年 2020-1021

一旦は華北を統一した苻堅は、淝水の戦いで敗れて、各勢力の離反が相次ぐ。統治者としてはやや甘かったのか、各勢力を征服してもほとんど、皇帝を生かしていたばかりか、逆に重要な役にも付けていた。後燕を立てた慕容垂、後秦を立てた姚萇。その姚萇に譲位を迫られるも拒否して、最後は縊り殺される。長安を慕容氏の別一派、西燕に攻められた苻堅は、五將山に逃げる。実はこの山が日本の「岐阜」の語源となる逸話がある。

五將山は岐山、長安の西、陝西省岐山県の北東の山。西周始王の武王の 3 代前の祖の古公亶父が移り、武王の父文王が豊京に都を移すまでの間、岐山の南麓が都とされた。すなわち岐阜であり、織田信長が岐阜を名付けたのもこれからきた。

岐阜に都すれば、長く王朝が伝わりと考えられていて、苻堅は長安を囲まれたとき、「帝は五將に出て久しく長きを得る」と逃げ込む。

<https://image02.seesaawiki.jp/.../shijitug.../ntMiIlj9ru.pdf>

最近では翻訳しながら、グーグルマップで地形を確認するようにしている。やはり単に地図を見るのではなく、細かい地形やムードを掴まないと、背景がわからない。中国は広くでかいのが実感できる。

■「資治通鑑」第 107 卷 387 年～391 年 2020-0706

中国南北朝時代でも混乱の極みの時代。一度北半分を統一した苻堅の前秦が、淝水の戦いで瓦解して、後燕、西燕、南燕、北魏、西秦、後涼などの国家が乱立していた時代。

実はこの混乱時代に、高句麗好太王が倭国と戦うことになる。好太王は高句麗本来の「高氏」ではなく「安氏」であり、この姓は安息パルティアから来ている可能性がある。また好太王は「談徳」という名前でも韓ドラでは「タムドク」として出てくるが、元々後燕の王族の「慕容氏」が高句麗に送り込んだとも言われている。つまり高句麗からみれば客分であった。

小林恵子は、「談徳」は「その後高句麗を追われて、倭国の仁徳天皇になった」と書いているが、どの程度までその可能性があるのか、誰も論じないので、検証するためにこの巻を急いで翻訳した。

391年は倭国の応神天皇が好太王と戦ったかもしれない年号だ。

■「資治通鑑」第109巻 397年 2020-0720

「資治通鑑」第110巻 398年

南北朝時代でも一番たくさんの国家が乱立した時代。特に北側では東の燕は3分裂、西の涼も3分裂し、真ん中の秦も2つと、それ以外にも英雄乱立した状態。また南の晋も反乱相次ぎ、外交の余裕など無い。丁度この時代は、朝鮮半島では高句麗の好太王安、(広開土王)が応神天皇と新羅を巡り交戦し、「好太王の碑文」に記される頃。高句麗を脅かす燕が急速に弱くなって、高句麗は安心して南の百済や新羅への侵攻ができたというわけだ。また燕国の内乱も、つまるところ朝鮮半島かせ倭国にかけての交易利権を争う戦いだったといえよう。すべての戦争はまず「経済」が原因となっているはず。

■資治通鑑 111巻 2020-0723

■「荊州は大水、平地は三丈、桓玄挙兵」是の歳、荊州は大水、平地は三丈、(7-046p)仲堪は倉廩を竭して以て饑民を賑わす。桓玄は其の虚に乗りて而して之を伐たんと欲し、乃ち兵を發して西上し、亦た「洛を救わん」

と聲言し、仲堪に書を與えて曰く：

資治通鑑111巻399年、今の三峡ダムあたりの洪水で、三丈の高さまで水没、それに乗じて桓玄は乱を起こす。仁愛厚き殷仲堪は、庶民の脈を自ら取るくらいで、水害飢饉では倉庫を空にして民衆を救ったが、その弱さのため、桓玄に滅ぼされる。

■資治通鑑」第111巻 399-400年 2020-0724

ちょうど高句麗好太王が倭国と激しく戦っている時代、実は北京あたりから満州まで支配していた後燕が北魏に押されて支配領域を狭くしてきた。

慕容宝時代は高句麗との関係がよかったが、宝が蘭干に殺されて、それを滅ぼした慕容盛の時代になると、一転して高句麗との戦いが始まる。

この時代、國と國との戦争は、まだ国民国家が形成されていないから、支配者の個人的関係が最優先される。まあ本当は、どの時代もそうかもしれないが。

今日現在のコロナ禍でも、国全体の利益よりも、政党や政権の都合が優先されるに似ている。

慕容氏や次の北燕の支配者の馮氏の家系から出たかもしれない百済の昆支王が、倭国の雄略天皇に転身したという、小林恵子さんの仮説。これを検証しようと資治通鑑の翻訳をしているわけ。

いわば現代なら、ルノーのゴーンが日産の社長や三菱自動車の社長を兼務したようなもの。ベネッセはマクドナルドの社長を呼んできて、数年やらせたとか。外様とか親藩とか。

抜群に能力があって、口が立てば、その人格はともかく、何処でも重宝され、君主や社長にはなる。だが地元出身ではないから、干されて追放もされる。人間とは、まだまだ精神的には進歩していないものだ。

低俗で宇宙人に笑われるよなあ。

「今だけ、金だけ、自分だけ」の人類はもう卒業しようよ。コロナはそんな試練かもな。誰が本当に人間

的に素晴らしく暖かい知事や市長か、よく品定めしてみたいものだ。

■燕の高句麗王安討伐 2020-0723

▲〔燕の高句麗王安討伐〕高句麗王の安は燕に事えて禮慢なり；二月，丙申（15日），燕王の盛は自ら兵三萬を將いて之を襲い，驃騎大將+軍（一國×）の熙を以て前鋒と為し，新城、南蘇の二城を抜き，境七百餘里を開き，五千餘戸を徙し而して還る。熙は勇は諸將に冠たり，盛は曰く：

「叔父は雄果にして，世祖之風有り，但だ弘略は如らざる耳！」

●初め，魏主の珪は劉頭眷之女を納れて，寵は後庭に冠たり，子嗣を生む。中山に克つに及び，燕主の寶之幼女を獲る。將に皇后に立てんとし，其の國の故事を用い，金人を鑄て以て之をトす，劉氏は鑄る所成らず，慕容氏は成り，三月，戊午（8日），慕容氏を立てて皇后と為す。

先週の講演に誤り有りだな。400年に燕国は高句麗に侵入。必ずしも高句麗は安心して南下は出来ていないな。

またここで「黄金人間を鑄る」てのが出てくる。北魏とか燕とかには、そんな風習があったって書いてある。一杉さん。

■「資治通鑑」113 卷 404 年、2020-0730

劉裕が建康を落として、総理大臣を代えた途端、たった十日で綱紀肅正し、風俗は頓改すてさ。

■〔劉穆之は綱紀肅正、旬日にて風俗は頓改す〕裕は始め建康に至り，諸の大處分は皆な劉穆之に委ね，倉猝（慌ただしく）にして立ちどころに定まり，允愜（妥当）せざるは無し。裕は遂に托するに腹心を以てし，動止は焉（これ）に咨（はか）る；穆之も亦た節を竭くし誠を盡くし，隱を遣わす所無し。時に晉の政（まつりごと）は寬弛にして，綱紀は立たず，豪族は陵縱（侮り欲しいまま）にして，小民は窮蹙（きゅうしゅく）（窮まり縮まる）し，重ねるに司馬元顯の政令を違舛（間違い）を以てす。桓玄は厘整（正す）せんと欲すると雖も，而して科條は繁密にして，眾（+衆）は之に従うは莫し。穆之は時宜を斟酌し，方に隨つて矯正す；裕は身を以て物に范（+範）し，先んじて威禁を以てす；内外の百官は皆な肅然として奉職し，旬日に盈（み）たず，風俗は頓改す。

「草間には當に英雄起つに有るべし」資治通鑑 113 卷 404 年の劉裕の言。

政府がアホでも、世の中の必要とする英雄は草の間から出てくるものさと、東京都医師会長の会見を見て思う。

■「資治通鑑」第 113 卷 403 年～404 年 2020-0731

安皇帝戊元興二年（癸卯 403 年）

【桓玄の王位篡奪と劉裕の動き】

安皇帝戊元興三年（甲辰 404 年）

【劉裕の京口決起】

中国南朝東晉の末期、孫溫の乱、桓玄の王位篡奪、劉裕の決起と内乱が続き、淮河のを越えて南から北へ難民が相次いだという。この頃は倭国では応神天皇時代、高句麗の好太王安、いわゆる広開土王との戦いがあり、また北の後燕国は次第に北魏に押されている。また山東半島あたりには南燕国が成立し、倭国への交易ルートもしばしば大混乱を起こしている。

■「資治通鑑」第 114 卷 405 年～408 年 2020-0806

▲「燕は高句麗を伐つ、皇后を待って攻略失敗」燕王の熙は高句麗を伐つ。戊申（26日）、遼東を攻め城は且に陥ちんとし、熙は將士に命ず：「先に登るを得るなかれ、其の城を剽平（切り平らぐ）するを俟ち、朕は皇后と輦に乗りて而して入らん。」是に由りて城中は嚴備するを得、卒に克たず而して還る。城攻めして、まさに落ちそうなのに、皇后が一番乗りしたいから、ちょっと待てと言われて、結局その間に守りを固められて落ちなかった。

この後燕の国王、慕容熙の皇后は符氏で、どうも高句麗に恨みがあったらしい。一国の政治も男女の愛憎が絡むと、たわいもなくねじ曲げられていくのは、今だけのことではない。因みに、この皇帝は、皇后の亡くなったときは尋常ではなく、群臣だけでなく庶民一般まで「殉死」を命ぜられるのではないかと、恐怖におののく。皇帝の弟の妻は、美人だからと殉死させられている。実際棺は10個城を出たと書いてある。

■「資治通鑑」第 116 卷 411 年～414 年 2020-0814

413 年は「晉書」安帝の義熙九年、「高句麗・倭国及び西南夷の銅頭大師が安帝に貢物を献ずる。」とある。

「宋書倭国伝」の 421 年の倭王・讃の朝貢記事と関連づけるのが一般的だが、本当はどうなのか。小林恵子は、北燕が建国したものの北魏に押されて、遼西・遼東方面に進出せざるをえず、高句麗の好太王安は、高句麗本来の高氏ではなく、燕の慕容氏の支援も得ていたから、おり場が無くなり、南下して倭王・仁徳天皇になったとする。

当時の国際情勢からいえば、小林説は決して荒唐無稽ではない。今回の翻訳の目的は、小林説を検証するだけの中国史の基礎知識を得るためなので、彼女の思考の構造は良く理解できるようになった。

この時期の中国北部では、鮮卑や氐羌、柔然などの北方遊牧騎馬民族が次々國を立てるが、匈奴の劉氏、鮮卑の慕容氏、中華人の馮氏、高句麗の高氏などが様々絡み合って、政略結婚も繰り返し、反主流派になれば極めて簡単に敵国に寝返って亡命政権を作る。

北燕の馮丕は北燕創立者の馮跋の弟だが、後燕→高句麗→北燕→北魏と移動している。最後に北燕を滅ぼすのは、北魏の将軍になっていた馮丕で、その後北魏が高句麗を征服しようとするのを止めている。若い頃亡命してお世話になった高句麗には仁義があったのだろう。

一族と国家と個人的な縁ががからみあって、様々な事件が起こる。

■「資治通鑑」第 118 卷 416－419 年 2020-0821

東晋の劉裕は念願の長安を落とすも、徐州に還るころには、北の夏の赫連勃勃に落とされてしまう。南船北馬、南が騎馬民族の北を軍事的に圧倒するのは実に難しい。

この時代、まさに日本列島には騎馬民族の影響が大きくなり、古墳にも馬具が副葬される時代。

+正確には 390 年くらいからどっと馬具は入ってきたのでないかな。高句麗と百済の戦いに倭国が巻き込まれた、というか、倭国自身も交易ルートの確保が必要だったのでしょう。

造山古墳の前の榊山古墳からは、馬型のバックルが出土。

■「資治通鑑」第 121 卷 428 年~430 年、2020-0905

北魏が徐々に周辺諸国を圧迫し、西秦を属国化、夏はほぼ壊滅させ、北の柔然を走らせ、南の呉を後退させる。東の北燕のみはかろうじて存続する。この時期はまだ倭国から中国への交易路は確保されていたが、あたかも仁徳天皇の時代で、前方後円墳が巨大化する時期。吉備の造山古墳の造営は既に始まっていただろう。

こうやって翻訳を進めてみると、造山古墳の被葬者は応神天皇か仁徳天皇ではないかとさえ思えてくる。すると現在の履中天皇陵の最大の候補は、宇治天皇、すなわちウジノワキノイラツコの可能性が。この時代まだ本当は天皇号は成立していないが、この頃中国の北方異民族の鮮卑などでは「天王」という称号が頻繁に出てくる。後の時代おそらく、天王と皇帝をミックスして天皇が作られたのだろう。

直接エフタルではないが、小林説なら、高句麗好太王安は安息、パルティアの流れで、匈奴の休とも関係があり、その後倭国に渡って仁徳になったとする。仁徳と好太王の談徳が似てるし、仁徳が宋に使いしたときの倭王讃は誉めるという意味だから、似ているというのだが、さてさてやや強引な気がするけどね。

■「資治通鑑」第 122 卷 431 年~435 年 2020-0905

北魏は西方の西秦、夏を滅ぼし、北涼を無理に滅ぼさず、和を結んで、次は西の北燕を攻略。ほぼ壊滅状態にし、北燕王は太子の王仁を魏に人質として出すと約束しながら、これを破る。どうしても嫌で、遂に南の宋に入貢し、東隣の高句麗に逃げようかと重臣と相談。重臣は高句麗には義がないから止めとけというのだが。

432 年 8 月北魏は北燕攻める。

平東將軍の賀多羅は帶方（郡）を攻め、撫軍大將軍の永昌王の健は建德（遼寧省朝陽市凌源県）を攻め、驃騎大將軍の樂平王の丕は冀陽（朝陽市）を攻め、皆な之を抜く。九月、乙卯（14 日）、魏主は兵を引いて西に還り、營丘、成周、遼東、樂浪、帶方、玄菟六郡の民三萬家を幽州に徙す。

つまり北燕は高句麗の領土を随分蚕食していて、樂浪、帶方、玄菟の今の東北や北朝鮮の黄海よりの部分は支配していたらしい。

■「資治通鑑」123 卷 437 年 2020-0905

11 月●〔魏の西域諸国との国交樹立〕魏主は復た散騎侍郎の董琬、高明等を遣わして多く金帛を繼ぎ、西域に使いし、九國を招き撫でしむ。琬等は烏孫に至り、其の王は甚だ喜び、曰く：

「破洛那（フェルガナ）、者舌（漢の康居国、塔什干、タシケント）の二國は皆な臣を稱し貢を魏に致さんと欲し、但だ路の自ら致る無き耳、今使君は宜しく過ぎて之を撫すべし。」

乃ち導譯を遣わして琬を送りて破洛那に詣らしめ、明けて者舌に詣らしむ。旁國は之を聞き、争いて使者を遣わして琬等に隨いて入貢するは、凡そ十六國。是れより毎歲朝貢して絶えず。

タシケント、出てきましたよ、一杉さん。ここで北魏から高句麗、倭国の交易ルートが成立します

■「資治通鑑」第 124 卷 442 年~446 年 2020-0912

この巻の完訳完成で、高句麗好太王の即位から、古事記の没年干支の雄略天皇の没年の 489 年までの、

通史として、中国の歴史を読むことができます。

まさに日本の古墳時代中期の時代背景を知るためには、必須の知りようではないかと思いますね。古墳研究者は是非とも読んでいただきたい。特に後燕、北燕、さらにはシルクロードの北涼などの相互の関係、そして北魏の道教と仏教の動向などが、基礎知識として重要なのではないか。また各国の徴税制度や班田収受制度の成長も、見ることができる。

■「資治通鑑」125 卷 447 年～450 年 2020-1215

11 月から、毎日着々と、現代地名探しと年表作りを展開している。数日に一度は、獲得した現代地名を Google マップと GoogleEarth を駆使して、座標データを入手。地図作りにも着手したわけ。

この二ヶ月、随分中国の地名には詳しくなった。もう 600 もの地名のデータを入手した。それにしても中国はでかいし、人口も凄いよな。どこまでも山奥まで人家があるし、結構平野部でも山もある。また江南の水郷地帯は本当に湖と中州だらけ。一度洪水があると数ヶ月引かないと言うが、さもありなん。

<https://image02.seesaawiki.jp/.../shijitug.../ppCZYeL9TZ.pdf>

■「資治通鑑」第 125 卷 2020-0504

「資治通鑑」の翻訳は第 2 ステージに入った。約 1 週間かけて 447 年から 450 年の古墳時代中期、允恭天皇時代の宋紀 125 卷を、「続国訳漢文大成 経子史部 第 7 卷」と照合して修正した。1932 刊行の全訳だが、いまは国立国会図書館にあり、画像を見ることが出来る。ありがたい時代だな。ネットにある原文とこの翻訳に遭われた原文は、もちろん結構差異がある。

これから週に 2 巻のペースで修正を加えるので、いま翻訳した 26 巻を約 3 ヶ月でやれるかな。なんせ僕は文法てのが苦手、というよりも嫌いで、それは法律が嫌いと言うのと一緒だ。大学時代僕のことを「無政府主義」と呼んだ奴がいるが、まさに自由人であることを目指してきた。

だが、実際にお金を稼ぐ商売人をやって、自由であることは実に難しく、逆にお金があることが自由をえる最短手段であったりする。大きく稼いだ瞬間は、だから随分傍若無人だったことも間々あるが、それは分かった上でやっていたかもね。

■「資治通鑑」第 126 卷完訳 2020-0505

今日は一日で「資治通鑑」126 巻を完訳できた。13160 文字。西暦 451 年と 452 年の部分。倭王済の使節団が宋の都建康に赴いたのが 451 年の 7 月。451 年の正月、北魏は宋の都の揚子江の対岸まで押し寄せていたが、食糧不足で撤退。

その後北魏では皇帝が宦官に殺され、また南宋でも皇太子の乱行が明らかになり、そのすぐあとにまだ殺されることになる。

■「資治通鑑」第 127 卷は 453 年 2021-0201

ふたたび「資治通鑑」翻訳の修正に着手、第 127 卷は 453 年で、南朝宋の元嘉の治の文帝が太子に誅殺され、尋陽にいた武陵王が攻め上りて破り、皇帝に即位。

前年 452 年 2 月には北魏でも大武帝が宦官宋愛に暗殺され、10 月に高宗文政帝が宋愛を殺して即位。南

北共に反乱が相次ぎ、周辺諸国への睨みが効かない状態であった。

450年には南宋が北魏を攻め、逆に秋から北魏が南宋の都建康、今の南京の側まで押し寄せて、451年の南宋の新春の朝会は開かれなかった。そんな中にこのこ出かけていったのが倭国王済の朝貢使節団。しかしうまいこと7月には安東大將軍の称号を貰って帰る。この使節団に吉備の尾代が参加していたというシナリオで、僕は「勾玉の首飾り」を書いた。そこで敦煌出身の僧と知り合い、倭国に連れて帰るという設定。

実は450年には仏教弾圧の急先鋒の、北魏の宰相崔浩は国史編纂で失脚し誅殺されていた。大武帝が殺されて仏教側が巻き返した。崔浩は道教の寇謙之と組んで大武帝を動かし、仏教大弾圧を行い、北魏から多くの仏教徒が南の建康に逃げ込んでいた。460年から北魏平城の近郊の雲崗石窟寺院を掘る曇曜は、西域から連れてこられていたが、弾圧中は逼塞していた。弾圧解除後、寇謙之に倣って当時の為政者との距離を縮めることを覚え、「鎮護国家」的な考えで布教するようになる。しかしこの頃既に高句麗や新羅にも仏教は伝わっていた。その後百済の聖明王が538年に倭国に仏教を伝える。だから僕の小説ではその76年前に倭国に仏教徒が来たと設定したわけだ。

今回色々調べているのは、450年に百済の使節として南朝宋に行った、馮野夫という人物についてだ。馮氏は438年に亡びた北燕の王族で、実質的には楽浪郡帶方郡などの高句麗領をほぼ制圧していて、北魏が攻め込んでいる。つまり高句麗は事実上海岸部を制圧できて居らず、北燕の滅亡とともにその領地は高句麗、百済が攻め取ったはずだ。

450年「正月辛卯（百済王余）毗は上書して方物を献す。私假臺使の馮野夫・西河太守は表して、易林、式占、腰弩を求む、太祖は並びて之に与う。」と宋書百済伝にある。西河とはこの頃北魏領であった山西省の臨汾市あたりのことで、元々馮氏が根拠地としていたあたりらしい。その後456年1月29日馮氏出身の文明皇后が北魏に登場し、465年からは馮皇太后として北魏の実権を把握して、彼女は490年まで君臨するのである。2006年の中国ドラマ「北魏馮皇后」の主人公。

書き直し中の「勾玉の首飾り」では、主人公を北魏にも行かせて、幼き馮皇后にも会わせてしまおうかと思っているのですよ。もちろんそのためには百済と南朝宋を行き来し、北魏にも顔の効く馮野夫に登場して貰わないとね。

なお、吉備の尾代も馮野夫も歴史書にはそれぞれ一行ずつしか登場しない。それを主人公にして千枚の小説にしようというのだから、小説家というのはまあ大嘘つきでないと成れないよな。まあしかしその為の取材で、2年半もかけて僕は「資治通鑑」の翻訳やら、吉備古墳図鑑を作っているわけですよ。ちなみに吉備尾代は総社市山手の宿寺山古墳に葬られたと想定しているわけです。

こうしたダイナミックな時代に、倭国の巨大古墳群は作られたということを知らないと、日本書紀を読んだり古墳を掘るだけでは、日本の創世記は語れないわけですよ。

「勾玉の首飾り」挿絵より <https://image01.seesaawiki.jp/.../shijitug.../QyP2Hbyiw8.pdf>

■「資治通鑑」128巻 455年 2021-0202

宋の国には宗廟の音楽がなく、ようやく復活。戦乱の中ではなかなか復活出来なかった。コロナ禍で音楽芸術は厳しいが、どの時代もその重要さは失われてはいけない。

〔宋は初めて備樂を設ける〕詔して郊に廟を祀り、初めて備樂を設け、前殿中曹郎の荀萬秋之議に従う也。（晋氏が南渡するや草創にして二郊に樂無し。宗廟には登歌あるも二舞無し。苻堅を淝水の戦いで破

って楽工を得て初めて金石の楽有り。文帝元嘉22年南郊に初めて登歌を置き、これを備楽という。能く雅楽を備えず、魏晉以来の世俗の楽のみで、順帝の昇明2年王僧虔の、朝廷の禮樂多く舊典に違うとは蓋しこの類を差す)

■「資治通鑑」第128巻は454年-458 2020-0513

南朝宋の時代。新帝が立つが、あいかわらず内戦状態が続く。この頃から皇帝が立てば、兄弟は皆殺しみたいな風潮が出てくる。そして自分の子たちだけをあちこちの王にするものだから、今度はすぐにまた殺しあうことになる。

最近それぞれの王の年を調べて驚くのは、今で言えば若造だったり、あるいは子供だったりする。残酷な王はやはり、精力有り余る10代が多いかな。僕の年なら確実に長老だね。

■「資治通鑑」第130巻完全翻訳、465年。2020-0521

宋の皇帝が暴虐で、前廢帝の時代。尋陽で子勲を擁立しようとする勢力が挙兵した矢先、首都ではクーデターが成功し、前廢帝が17歳で殺され、明帝が立つ。一方尋陽の勢力は、先を越されて挙兵を止められず、このあと国を二分する内乱状態に陥る。

戦前に翻訳された国会図書館の画像を参考に、翻訳を進めているが、やはり随分原本の文字がいまのネットにある原文と違うので、一応その違いを表示し、自分の判断でよりふさわしい物を取る。だが是で分かるのは、手で書き写すというのは、いかに間違いが多いかだ。だから邪馬台国論争や日本書紀編纂時だって、随分苦労しただろうと言うことがわかる。また漢字の訓読みも、こうやって新たな訳を作ったのだなあと納得できる。

驚いたのは、国会図書館のデータが2P分スキャンが飛んでいること。まあ人間だから、間違ふよな。飛んでいるよと教えてあげようかな。

■「資治通鑑」第131巻466年 2020-0529

翻訳完了。ほぼ1年かかって南朝宋の内乱が収束するが、北部の3州を結局北魏に取られて、宋は滅亡に向かう。丁度この頃、倭国の倭王武、雄略天皇は朝鮮半島の新羅、百済、高句麗とのすさまじい利権あらそいの渦中にあり、宋の支援を得たいと願うが。

この翻訳では、当時の倭国を含めた国々が「將軍号」をいかに欲しがり、「開府」の権利を得たいと思ったかがよくわかる。府を開く権利とは、すなわち幕府を開く権利と言うことで、鎌倉幕府、室町幕府、江戸幕府もすべてこの流れであり、この時代を知ることが日本を知ることにもなる。

■「資治通鑑」第132巻、467年～470年。 2020-0602

翻訳完了。南朝宋の内乱は平定されたものの、北魏の圧力は強まり、北魏に滅ぼされた燕の王族・慕容白曜將軍が山東半島の付け根の歴城などを攻め、ついに陥落。宋の領土は大きく削られ、北魏は絶頂期を迎える。

この頃倭国の雄略天皇も東西に勢力を拡大し、翌471年の稻荷山鉄剣の年代を迎える。朝鮮半島では高句麗と、倭国・百済がせめぎ合う。

ただこの間、倭国から宋に向かう山東半島からの沿岸部は、戦乱で荒れていて、海路も決して安全ではなかったはず。こうした事情を日本の古墳時代研究者はもっと知らなければならない。岡山では両宮山古

墳築造の時代ではないだろうか。

■「資治通鑑」第 133 卷 471 年～475 年、2020-0607

日本では雄略天皇時代。埼玉県稲荷山古墳の鉄剣銘は 471 年、475 年には百済の王都が高句麗に攻められて、一度滅亡する年。この頃も宋は内乱続きで、次第に弱体化し、その間隙を突いて高句麗は南に侵攻。

■「資治通鑑」第 134 卷 476 年～478 年 2020-0612

<https://image02.seesaawiki.jp/.../shijitug.../eF5LHEylja.pdf>

■ 478 年・(倭王武の上表文)「順帝の昇明二年、使を遣わして上表して曰く、『封国は偏遠にして、藩を外に作す。昔より祖禰躬ら甲冑をツラヌき、山川を跋涉し寧処に遑あらず。東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国、渡りて海北を平ぐること九十五国、王道融泰にして、土を廓き、畿を遐にす。累葉朝宗して歳に愆ず。臣、下愚なりといえども、忝なくも先緒を胤ぎ、統ぶる所を驅率し、天極に帰崇し、道百済を遙て、船舫を装治す。しかるに句麗無道にして、図りて見吞を欲し、辺隸を掠抄し、虔劉して已まず。毎に稽滯を致し、以て良風を失い、路に進むというといえども、あるいは通じあるいは不らず。臣が亡考済、実に寇讐の天路を壅塞するを忿り、控弦百万、義声に感激し、方に大挙せんと欲せしも、奄に父兄を喪い、垂成の功をして一簣を獲ざらしむ。居しく諒闇にあり兵甲を動かさず。これを以て、偃息して未だ捷たざりき。今に至りて、甲を練り兵を治め、父兄の志を申べんと欲す。義士虎賁文武功を効し、白刃前に交わるともまた顧みざる所なり。もし帝徳の覆戴を以て、この疆敵を摧き克く方難を靖んぜば、前功を替えることなけん。窃かに自ら開府儀同三司を仮し、その余は咸な仮授して以て忠節を勧む』と。詔して武を使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大將軍倭王に除す。」

● 478 年(134 卷)・1 月沈攸之は郢城を攻め落とせず江陵に逃亡、縊死。戒嚴令解除。3 月黃回に帰還。4 月黃回の誅殺。8 月二尚方の廃止。9 月蕭道成に九爵。既に蕭道成の覇権が明確になる。

■「資治通鑑」第 135 卷 2020-0618

西暦 480 年の所を翻訳していて驚いた。

■**[囚人の疾病を蒸し殺すを禁止]十一月**，戊寅(16 日)，丹陽尹の**王僧虔**は上言す：

「郡縣の獄は相承(相伝)けて湯に上りて(疫病対策で蒸すのが昂じて)囚を殺す有り，名(目)は疾を救うと為し，實は冤(濡れ衣)暴を行う。豈に死生の人命にして，而して潜かに下邑に制す有らんや！愚かにも謂う囚の病は必ず先ず郡を刺し(病気の囚人の姓名を報告する)，職司と醫とは對して共に診驗するを求め，遠縣の家人は視るを省き，然る後に處(処方して)治すべし。」

上は之に従う。

要するに当時も、燻蒸するのが感染症対策にはいいと分っていて、刑務所で蒸していたものが、最後にはそれぞれの牢獄で釜ゆでして殺すようになっていた。それを丹陽尹、すなわち首都近くの重要拠点、まあ神奈川知事がやめようと皇帝に進言した。やっぱり当時もインフルが蔓延したのかもしれないな。

■「資治通鑑」第 135 卷 2020-0619

太祖高皇帝永明元年（癸亥，四八三年）

■**春，正月**，辛亥（2日），**上**は南郊に祀り，大赦し，改元す。

■詔して邊境の寧晏なるを以て，治民之官に，普(あまね)く田秩を復す。

宋の文帝の元嘉 27 年北虜によりて俸禄を減ず。淮南太守諸葛闡は俸禄を減じて内の百官に比すを求め、諸州の郡県丞尉全て減じる。明帝の時軍旅やまず府庫は空荷なり、内外の百官全て俸禄を断つ。

当たり前の事だが、官吏の俸禄が無ければ、賄賂が横行し、政治は不安定になる。官吏や政治家に仕事をさせようと思ったら、ある程度の所得は保証してやらないといけない。同じく医療やバスの運転手などの社会基盤労働者についても、一定の保証は必要。

さらに今回のコロナでわかるように、国家が税金を取るというのは、いざというときの生活保障のためだ。変換していて、保証、補償、保障の使い分けは難しいなあ。

「資治通鑑」第 135 卷完訳終了、479 年～483 年 2020-0621

宋の將軍の蕭道政は禪讓の形式を取ってついに皇帝に即位。当然のようにしばらくして禪讓した宋の皇帝は、誅殺される。中国でもどこでも、武力討伐は常に悪とされるが背、自殺に追い込む、詰め腹を切らせるというのは、今のパワハラと違いはしない。

いま自民党内の「禪讓」。野党の政權交代はいわば「武力制圧」なのだが、普通こういう場合、野党は与党内の分裂を計って多数を占めるのをめざすものだ。だがそういう手法や文化をどうも歴史に学んでいないようだ。

■「資治通鑑」臺 136 卷 484—489 年 2020-0624

●「魏は春夏大旱と齊州刺史韓麒麟の上表」魏は春夏に大旱，代の地は尤も甚し；加えて牛疫を以て，民の餓死者は多し。六月，癸未（29日），内外之臣に詔して極言して隠す無からしむ。齊州刺史の韓麒麟

は上表して曰く：

「古先の哲王は，儲積九稔（三年耕して一年の食を積み、九年で三年余し、三十年で九年積む。国は九年積まざるは不足、六年積まざるは急、三年積まざるは国に非ず）；

飢饉に備えて3年食料備蓄していないのは「国家ではない」と古代中国では言っている。国家はもしもの時の安全保障のためにある。

この時代、牛窓の吉備海部直の水軍は、宋や齊の海岸まで出かけていっただろう。

■「資治通鑑」第 137 卷 490 年～492 年 2020-0917

この時代は既に北魏が周辺諸国を圧倒し、南朝は齊の時代。長く北魏に君臨したある意味女帝の「文明皇太后」が亡くなり、いよいよ皇帝親政が始まる。文明皇太后は滅びた北燕の馮氏の出身。滅びた方が娘を人質的に差し出したり、奪われたりしても、その後相手の実権を奪ってしまうことはままある。

皇太后は包容力と冷静な判断力、さらに果敢さも持ち合わせて、皇太后になってから、皇帝そのものの暗殺さえ行った。実はこの皇太后の実権を持つ時代、高句麗と倭国の関係が最も先鋭的になるのだが、果たしてどのような関連があるのだろうか。

■「資治通鑑」第 138 卷 493 年、2020-0921

北魏の皇帝は群臣の反対を押し切って、平城から洛陽への遷都を敢行する。南朝の齊を討つと称して、長雨の続く中を出征し、群臣は大反対。遂に「ならば遷都するぞ」と群臣を脅して、遷都に成功する。

これより北魏は中華帝国としての道を歩み、漢化政策を遂行する。やがてこの流れが百年後の隋唐帝国に繋がる。

■「資治通鑑」第 139 卷 494 年 2020-0925

南朝宋では、鬱林王が廃され、明皇帝が立つ。この皇帝は 18 人もの王子を皆殺しすることになる。南朝では宋時代以来、沢山の弟達の反乱が起こり、内乱も絶えなかったが、明皇帝は激しかった。

一方、北魏はそれなりに安定しており、首都を内モンゴル地域中心の平城あたりから洛陽に遷して、いよいよ本格的な中国王朝となる土台ができあがる。北朝は文武共に名君に恵まれ、兄弟間の殺し合いが少なかった。

此の年の北魏皇帝の北方巡回の記録

「●八月癸丑（11日）、魏主は懷朔鎮（綏遠特別区域五原県、現・内モンゴル自治区バヤンノール市五原県）に如く；己未（17日）、武川鎮（綏遠特別区域武川県、現・内モンゴル自治区フフホト市武川県）に如く；辛酉（19日）、撫宜鎮（武川鎮・柔玄鎮の間のどこか）に如く；甲子（22日）、柔玄鎮（正黄旗察哈爾牧地の東南、察哈爾(チャハル)興和県、現・内モンゴル自治区ウランチャブ市興和県）に如く；乙丑（23日）、南に還る；辛未（29日）、平城に至る。」

■「資治通鑑」第 140 卷 495 年～496 年 2020-1001

平城から洛陽に遷都し、北方の胡族の風習を中華風に改めようとする北魏皇帝は、北に帰りたい豪族の反乱にあい、また皇太子までもが勝手に帰るという事態も起こる。皇太子は打ちたれて庶民に落とされる。

いま中国で様々な民族自決と中央集権のせめぎ合いは、何時の時代も中国を翻弄し続けている。北魏の場合は胡族出身の皇帝自身が中華化を強制していたが、これは実に珍しい。

中国を統一すると云うことは実に難しい。日本の比ではない。

■「資治通鑑」第 141 卷 497 年～498 年 2020-1003

齊の高宗明皇帝は猜疑心が強く、先に王族の 19 人の王を殺し、また尚書令を誅殺。一方魏の皇帝も胡の風俗を離さない穆泰らを誅殺。前太子も誅殺。

北魏は万全の体制で南も齊に侵攻するも、漠中の氏帥の楊靈珍らの反乱がおこり、ようやく後顧の憂いを絶つ。

魏はひたひたと南に侵攻し、現在の南陽・信陽・淮南・連雲港のラインまで確保する。

齊の李冲と李彪はまたまた謹慎の十王を誅殺し、太祖、世祖及び世宗の諸子は皆な盡きる。

一方、北魏でも洛陽の留守番の李冲と李彪の確執が激化、「思わざりき、留台のかくに至るや」と嘆く。齊ではまた会稽の王敬則が反乱、首都建康に迫るも鎮圧。一方北魏が平城から洛陽に南に遷都したことから、北の高車が活発にうごめき始めて、新たな後顧の憂いが生じる。

大虐殺の高宗明皇帝は遂に病死して、北魏は「禮に喪を伐たず」と称して撤退していく。
人はまさに、どの時代もよくもよくも、争いの好きなことよ。

■「資治通鑑」第 142 卷 2020-0409

並是五省案黄

資治通鑑 142 卷 499 年、皇帝が遊びほうけて、夜中から朝まで宴会で、朝見が無くなり、月のうち何日もどこに居るか分からず、宦官はこっそり豪華な食べ物を持ち帰り～

それで黄色がどうしたのかと思ったが、要するに上がアホだと、下の 5 省の官僚は法案を黄色になるまでほっとくわけだ。

■「資治通鑑」第 142 卷 499 年 2020-1006

北魏の皇后馮氏は宦官と通じて、廃せられるが、その此の年皇帝は南の齊に侵攻中に病で亡くなる。其の死後、元皇后は誅せられ、文明皇后以来北魏に君臨した元々燕の支配者一族の馮氏は遂に没落する。倭国との関係も様々あるかもしれない一族だ。

さて南朝の齊では、一族の男子を全て殺した明帝のあと、さらにまだ少年の東昏侯が即位し、残虐度を増す。朝廷の政治は六人の宰相が代行するも、内紛は続き、まず吏部郎の謝朓の誅殺、江祐兄弟の誅殺。続いて始安王の蕭遙光の反乱と鎮圧。その鎮圧した功労者の粛清。

東昏侯は左右の悪ガキどもと、夕方起き出してあちこち荒らし回り、民は恐ろしくて外出もままならず、失業者相次ぎ、妊婦は腹を割かれたり、老法師は百本の矢で射られたり。

ついにたまりかねた北魏との戦いの功労者、陳顯達は江州で挙兵し、都の建康に迫るも、あえなく破れ誅殺。さて 143 卷ではどうなるのか。

「資治通鑑」第 143 卷 500 年 2020-1008

齊の東昏侯の暴虐はやまず、一月豫州刺史の裴叔業は帝が数々大臣を誅するを聞き、心は自ら安んぜず；壽陽城に登り、北に肥水を望み、反乱を起こすかどうか迷う。結局北の魏に救援を求め、壽陽に魏軍が入るが裴叔業は直前に死す。

次に齊は平西將軍の崔慧景を遣わして水軍を將いて壽陽を討たしめるが、首都を逃れた崔慧景は逆に反乱を起こして首都・建康に攻め寄せるも、城を落とす直前に戦功争いで瓦解し、四月皆誅殺される。東昏侯は反乱軍に擁立された弟の寶玄を許す。しかし五月、ほとぼりが冷めると寶玄は殺される。

ここで横暴なる東昏侯の側近には、さらなる暴虐な側近が集り、その中で宦官の王寶孫は、年十三四、号して「佞（狂）子」といい、尤も寵愛され、大臣を制し、詔敕をつくり、馬に乗りて殿に入り、天子を叱責するに至る。公卿は息を潜めないものはない。

東昏侯は豪華な宮殿を建設し、壁に麝香を塗り、金をうがちて蓮華をつくり地に貼り、愛妾の潘妃に其の上を行か令め、曰く：

「此の歩歩は蓮華を生ずる也。」

と。朝廷は悪ガキの少年少女に支配され、もう大人はやってられない事態になる。嬖倖之徒、すなわち悪ガキは自ら「鬼」

と称す。困るという意味の「へいこうする」との言葉は、ここからくる。

王族の端に連なる蕭懿は十月誅殺され、その弟達は逃げ、翌年梁を立てる蕭衍はついに十一月襄陽にて兵を挙げる。朝廷は追討軍を派遣する。

どの時代も、悪知恵の働く悪ガキはいるもので、類は友を呼び、財や地位を餌に人を釣り、好き放題やるものだ。今から 1520 年前の話。

ここまでで日本の古墳時代中期に相当する、資治通鑑 107 巻から 144 巻の 38 巻、原典 39 万 271 文字を完訳終了、77 万 3259 文字。2018 年 8 月 28 日から約 2 年 1 ヶ月余りかかった。さてこれからこれを元にした詳細な年表づくりにとりかかる。

[その他の記事]

■太平御覧の記事注目、髪長姫 2020-1219

《秦書》に曰く符堅の建元十八年（382 年）、新羅國王の樓寒（第 17 代奈勿麻立干 356-402）は使いの衛頭を遣わして美女を獻ずる。國は百濟の東に在り、其の人は多く美しい發（髪）あり、發は長さ丈餘あり。又た曰く：符堅の時、新羅國王の樓寒は使いの衛頭を遣わして朝貢す。堅は曰く：「卿の海東之事の言は、古（の韓の風俗）と同じくせず、何（故）也？」答えて曰く：「亦た猶ほ中國の、時代が變革し、名號が改易されるがごとし」

丁度この頃、新羅攻略の葛城の襲津彦がやはり美女を新羅に贈られて、逆に加羅を攻めたと、百濟記にあるよと日本書紀は書いているね。神功皇后 62 年で、おそらく同じ年なのではないか。

なお、日本書紀応神天皇 13 年に、日向の髪長姫というのが出てきて、息子の仁徳天皇が横取りする話が出てくるが、実はこれも応神天皇が仁徳天皇の歓心を得るために髪長姫を送ったと考えるのがよい。つまり応神天皇と仁徳天皇は親子では無かったということだ。髪長姫はひょっとして、新羅出身だったりしてね。

なお小林恵子は応神天皇を符堅の親族の苻洛とし、仁徳天皇を高句麗好太王安だとする。そう考えると仁徳天皇の即位の所で、武内宿禰と応神天皇が子供の名前を交感したという話がリアルに思える。名前を交感するとは、政権交代を表すのだ。

選挙だ負けたら「知事」「総理」といった名前も呼び方が変わるのと一緒だ。

★（岡上佑）これは面白い記事ですねー。全然ノーマークでした。「海東」はやっぱり朝鮮半島のことだというのが、一つ、髪長姫と新羅の関係も興味深いですね。襲津彦の記事は 3 巡させて 442 年とする考えもありますね。そうすると応神・仁徳の髪長姫の故事とも有機的な繋がりを見出せる可能性までありそうです。

■僕もノーマークだった。今は中国の古典もテキストで全部読めるからね。「ローマ文化王国、新羅」という本で見た。新羅は黄金の国だったのは、ローマからスキタイ、匈奴の流れだという。いわゆる草原の道だね。もう 20 年以上前に慶州に行ったとき買ってきた、「天馬塚」の黄金の冠模型、こうした冠は圧倒的に新羅で出ているが、日本に藤木古墳、江田船山古墳、金冠塚などから出ているが、特に勾玉がちりばめられたの最上級の王冠は、日本書紀には大草香皇子の持っていた「押木玉蔓」にあたると思う。

■「騎馬民族客人説」 2021-0114

先般からの古代史の思考から、いま思いついた！

騎馬民族は古墳時代に確かにやってきたが、征服する程の人数ではなく、いわば半ばは亡命者として、あるいは高貴な血を引く知識人文化人として倭国に到来した。

彼らは倭国にきて、大王にはなったが、あまり統治には関わらず、中国大陸での捲土重来を期した。応神、仁徳、允恭、雄略、欽明、天智、天武はみなそうだろう。

当時的大陸では、「倭国ではすぐに王になれる、捲土重来を期すなら倭国が容易い」との噂があった。

一方で逆に倭国から大陸で一旗揚げようとする者も出てくる。神功皇后や紀大磐宿禰が典型的。大磐は「三韓に王たらんとした」夢が破れて、引き上げてきた。

この説は騎馬民族征服説と小林恵子を足して二で割っただけだよな。